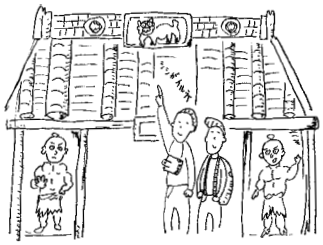
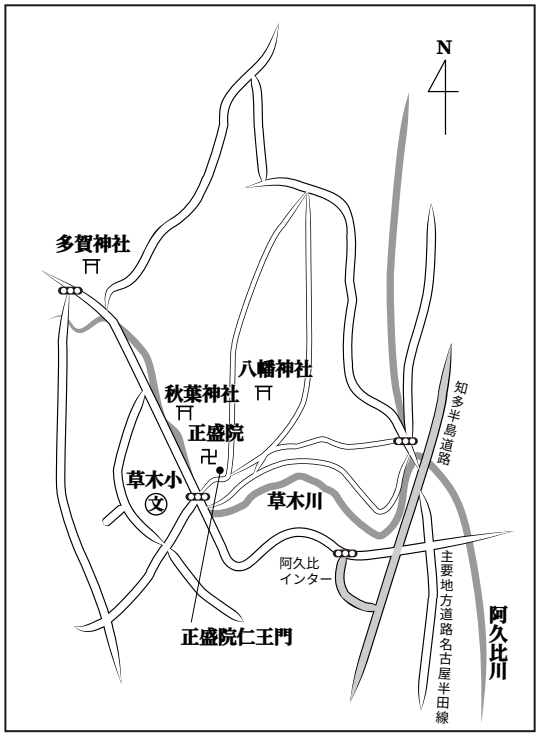


シリーズ 阿久比を歩く⑬⑥

あぐいぶらり旅

建造物を見る（正盛院仁王門）



仁王門正面

草木地区にある正盛院（しょうせいいん）を友人と二人で訪れ、町指定文化財「正盛院仁王門」を見た。

石畳の参道を登りきった場所に建つ、木造瓦葺切妻造の「仁王門」。寺院の建物を守る神、金剛力士〝仁王〟一対が左右に安置される門を「仁王門」と呼ぶ。

「太い柱は、柱組みが頑丈で解体できなくて、草木地区の力自慢が肩に担いで、今の場所に運んできたと、先代の住職から聞いております」と正盛院住職が笑顔で話してくれた。

仁王門は、宝暦二（一七五二）年、正盛院の末寺「竜光寺（草木小学校西付近にあった）」に建立された記録が残る。明治十四年竜光寺が廃寺となり、翌年、村自慢の「仁王門と仁王像」を手放したくない思いから、草木の村人総出で解体することなく、正盛院の現在の場所に移す。

横の長さが三間（五・四六メートル）。左右に二本ずつ太い柱が立ち、その奥は仁王像が安置される部屋が設けられ、真ん中は境内入り口となる空間。部屋の中では、目を見開き、大きく口を開けた仁王と、固く口を結んだ仁王の二体の像が阿吽（あうん）の呼吸で門番を務める。

正盛院仁王門は、阿久比町が昭和五十五年、文化財「第一号」に指定した貴重な歴史的遺産。その両脇に納まる二体の仁王像（室町時代初期の作と推定。竜光寺建立時に京都から下る）も町指定文化財。

年輪を重ねた木造の門を森の「木」と勘違いしたのか、セミたちの抜け殻が柱や軒先に張り付く。大正九年に地元大工により補修された「門」も、年月が経過して所々傷みが目立つようになってきている。

力自慢の人たちが、解体せずに運んできたという「仁王門」。どっしりと腰を下ろす姿には風格があり、緻密（ちみつ）な骨組みや瓦の葺き方などから、人々の力が加わった息吹が感じられる。

「君、〝きゃしゃな〟体だけど、柱を担ぐのを手伝ってほしいと言われたらどうする？」と私が友人に聞く。

「もちろん手伝いますよ。最近、我が子をおんぶして、体鍛えてますから」。子どもが生まれる前までは、「箸（はし）より重いものは持ったことがない」と自慢していた友人だったが…。

参道を下る。木々の葉っぱが色づき始めた。少し早い、紅葉狩りを楽しむ。仁王門の屋根にはイチョウの葉が積もり始めていた。

桐の紋入りの鬼瓦がのる屋根